

5/16(土)まじど！倫理が、望みを失くすは避けられない」と倫理の学がで解いた。古事記の学いとはコトが関係 長谷川まじど。 幸や望みは正一鳥

10/1

# 陽はかならず昇る

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

「生命のあるかぎり、希望はあるものだ」

(セルバンテス『ドン・キホーテ』)

地球に生きる人間をはじめ、あらゆる生物に圧倒的な力と影響を及ぼしている存在——それは太陽です。

おもに水素やヘリウムで構成されるガスの塊（かたま）である太陽は、地球から約一億五千万キロメートルも離れた宇宙空間に輝いています。光の速さでは地球から約八分半、ジェット機だと十七年、新幹線で走ると六十年もかかるのだとか（歩いて行ったら二〇〇〇年以上？）。そんな距離に離れていても、太陽光を長時間浴びると、真つ赤（真つ黒）に日焼けしてしまいます。

太陽の大きさは地球の一〇九倍ほどで、核融合反応によって放出する毎秒のエネルギーは広島型原子爆弾の五兆個に相当するとか（想像も及びません）。年齢は約四六億歳、人間でいえば壮年期でしょうか。その太陽の外層には、ラテン語で「冠」を意味するコロナ (corona) という希薄なガスの層があり、皆既日食の際には肉眼で見ることが出来ます。今年になって人類を苦しめているウイルスは、その概観が太陽の光冠とよく似ていることから「コロナウイルス」と名づけられました。

太陽の表面（光球）の温度は約六〇〇〇度で、そこには黒点と呼ばれる部分が観測できます。黒点の温度は約三八〇〇度と低いために、放つ光の量も少なく、黒く見えるのです。その黒点が約十一年の周期をもって増減することはよく知られています。太陽活動には一七五五年から始まった周期を第一周期とした通し番号が付けられていて、現在は二〇〇八年十二月からの第二十四周期がそろそろ終わる頃です。

その第二十四周期が始まる前に、不思議な現象が太陽

に見られました。黒点が消滅したというのです。専門家は「太陽の活動がこの五十年で観測された中で最も弱まっているようだ」と言っていました。筆者はそのことを八月にニューヨーク倫理友の会の会報で知らせ、地球に何か影響があるかもしれない、と書きました。すると翌月、リーマンショックが発生し、世界は大混乱に陥りました。さらに翌年にかけて、メキシコで発生した豚由来の新型インフルエンザが世界に拡散して、パンデミックが宣言されたのです。そうした太陽活動の周期と照らし合わせると、今年のコロナパンニックの発生も第二十五周期の始まりと関連性があるのかもしれない。

なお、二〇〇九年七月二十二日には、日本の各地で皆既日食が観測されました。陸地では一九六三年七月に北海道東部で見られて以来、実に四十六年ぶりとなる天体ショーでした。その前日の七月二十一日に、衆議院が解散し、歴史的な政権交代となったものの、政界は混迷が続きました。

\* 太陽が月によって全部隠れてしまうのは「皆既日食」と呼ばれ、月のまわりから太陽がはみ出して見えるときには「金環日食（または金環食）」と呼ばれます。この天体ショーは毎年のように地上のどこかで見られ、世界各地の日食を追いかけている人たち、人呼んで「日食ハンター」がいます。その一人が「あなたたちはなぜお金も時間もかけて日食を追い回しているのか？」と問われて言いました。——「昼が突然、夜に変わる天体ドラマの神秘は、体験した人にしかわからない。太陽と月が重なる瞬間は、それはそれは感動的で、うち震えてしまします」。

(次ページにつづく)

五月度一向「見えぬ敵 見えぬ心で 受け入れる」 どうぞ



ところで世界の神話伝説には、日食に由来するものが多いところがあります。日本の神話であれば、アマテラス(天照大神)の「岩戸隠れ」がそれに当たるでしょう。ちなみに神話とは、古代人の幼稚な空想の産物ではありません。その民族の起源や伝統のルーツをなす物語であり、そこには固有の生活文化や先祖の叡智が反映しています。「岩戸隠れ」の神話のストーリーを、若い世代のほとんどが知りません。教えられていないのですから無理もないでしょう。中高年はどうでしょうか。おおよそのストーリーは知っていても、『古事記』の本文をしつかり読んだ人は少ないではありませんか。そこには次のように書かれています。

——弟のササノオの乱暴狼藉にひどく怒ったアマテラスは、天岩戸(あまのいわと)に引きこもってしまった。すると天上(高天原)も地上も闇に包まれ、さまざまの災厄が発生した。そこで、八百万(やおよろず)の神々は天の川原に集まり、どうしたらよいかを相談する。智慧の神であるオモイカネが妙案を授け、ある儀式を行うことに決まった——

さて、ここからが大事なので、詳しく見てみましょう。儀式のためにどんな用意がなされたでしょうか。箇条書きにしてみます。

- ①不死鳥である長鳴鳥(ながなきどり)を、鶏を集め、大声で鳴かせる。
- ②天の川上にある大きな岩を運び、天の金山から砂鉄を採ってきて、鍛冶屋のアマツマラを呼び寄せて洗煉させ、イシコリドメに命じて鏡を作らせる。
- ③タマノオヤに命じて五百もの勾玉(まがたま)を買いた玉飾りを作らせる。
- ④アメノコヤネとフトダマを呼び、天の香具山に棲む牡

鹿の死体から抜いた肩の骨を、ハハカの木で焼いて占わせる。

- ⑤そうして得たお告げにより、天の香具山から五百本以上の賢木(さかき)を根こそぎ抜いて、上の枝には先ほどの玉飾りを取り付け、中の枝には八尺鏡(やたのかがみ)を取り付け、下の枝には白と青の御幣(ごへい)を垂らす。

- ⑥フトダマがそれらをお供えし、アメノコヤネが、荘重な祝詞(のりと)を唱える。

- ⑦力の強いタジカララに、天の岩屋戸のわきに隠れて立たせる。

- ⑧美しいアメノウズメに、天の香具山のヒカゲノカズラ(シダ系の植物)をたすきに懸け、ツルマサキを頭にかぶり、笹の葉を手にもって、天の岩屋戸の前に桶を伏せて、それをドンドンガラガラ踏みつけながら踊らせ、神がかりにさせる。

なんと入念な準備でしょう。アメノウズメが踊り出しました。次第に踊りがエスカレートすると、乳房をかきむしり、陰部を広げて、そこに着物のひもを垂らすではありませんか。その滑稽な様子に、見ていた神様たちは大声で笑い出し、高天原はどっと揺らぎました。岩戸の中のアマテラスは、外の大騒ぎを不思議に思い、入り口を少し開いておっしゃる。

「わたしが隠れてしまったので、世界は闇に包まれて暗くなったというのに、どうして皆は大声で笑っているのか？」

そこでアメノウズメが、「あなた以上の尊い神がいらっしゃるので、われわれはみな喜んで笑い、楽しんでおりました」と答える。そして鏡を差し出してアマテラスに

(次ページにつづく)

見せると、自分の姿が鏡に映ったので、アマテラスはますます怪しいと思つて、戸から身を乗り出して外をうかがったところ、隠れていたタヂカララがアマテラスの手をとつて引き出し、すぐにフトダマが、注連縄（しめなわ）を岩戸の入り口に引き渡し、「もう、ここから中へ戻ることはできません」と申し上げました。こうして、アマテラスが、天の岩屋戸から出てこられたので、天上も地上も元のように明るくなったのです。——メデタシ、メデタシ。

\*

太陽がすっかり隠れ、天地が真っ暗で冷たくなるとは、生物にとつて滅亡に至る大苦難です。それでも神々（人々）は叡智によつて、それぞれに役割を果たし、乗り越えました。ここぞなにより肝心なのは、明朗な精神に貫かれていたことです。倫理運動を興した丸山敏雄はこう書きました。

朗らかは、人の天性である。子供を見よ、祖先たちを見よ、みな明朗闊達である。我らの先祖たちが、大変なことだと思われるような大苦難に出あつても、皆集まつて、音楽を奏で、歌をうたつて、「あなおもしろ、あなさやけ……」\*とはやして喜んだことは、歴史の示すところである。そして、喜ばば喜んだように結果が必ずよくなる、という体験をしっかりとつかんでいた。そしてどんな時でも、悲しみ恐れ心配することはいけない、と知りつくしていた。そして勇敢におそいかかつて来る苦難を、つきぬけたのである。

（「明朗」、『人類の朝光』所収）

コロナ大不況によつて世の中から明るさが消え、先の見えにくい不安が渦巻いています。そんな時代だからこそ、民族のルーツである神話に描かれた神々の智慧と方策に思いを馳せてはどうでしょう。前回も書きましたように、「仕方がない」のではなく、「仕方はある」のです。打つ手は無限にある、ということなのです。

もしすぐに打開の方策が浮かばなくとも、希望を捨てない心だけは持ち続けたいものです。「希望は心の太陽である（心即太陽）」と純粋倫理の生活法則は教えます。

うまく行かぬから、望みを失うのではない。望みをなくするから、崩れて行くのである。みかけがよく見えたり、悪しく見えたりするのは、ただ表面の変化であり、一時のきまぐれで、かえつておもしろい事である。それは、すでに大きくのびるための、一時の屈曲（かがみ）であり、高くのぼるためのふんばりである。

（『万人幸福の栞第十四条』）

希望を掲げて前進するとき、難題を解決する道はきつとひらけてきます。つねに明朗闊達な心を先行させる、それが倫理実践の肝心要なのです。

なお先月二十八日にはアメリカの国土安全保障省が「新型コロナウイルスは太陽光によって急速に不活性化する」という研究結果の一部を公表しました。晴れた日には日光を存分に浴びて、心身共にすがすがしさを取り戻したいものです。

\*「あなおもしろ……」のはやし言葉は『古事記』ではなく『古語拾遺』（斎部広成撰）に出ています。